

都立府中リハビリテーション学院長 五味重春

「脳性まひ児のリハビリテーション」

東大整形外科 津 山 直 一

脳性麻痺に関する書物は著書、訳書をまじえて近年かなりの数を見るようになった。今般五味重春氏が脳性麻痺児のリハビリテーションと題して著書を著わされたが、一読し、まことにこの著者でこそ書けると思われる諸事項の数々あることを痛感した。五味さんは私より入局一年先の同じ故高木憲次先生の門下であって現在は東京都立府中リハビリテーション学院長として理学療法士や作業療法士の教育に打ちこんでおられるが、現職に移られるまでは多年にわたり東京整肢療護園に於て脳性麻痺児の療育に努力をつづけてこられた方であり、今日でも我が国における脳性麻痺研究グループの指導者的立場にあって、脳性麻痺児の療育に対する変らざる情熱をもちつづけておられる方である。この書は著者の意図としては脳性麻痺児のリハビリテーションをわかりやすく説くことを

目的とされたのであろうが、内容には著者がライフワークとされる脳性麻痺児の社会復帰へのアプローチの現段階でのまとめとして真に世に問う書と称して良い内容のものが感じられる。脳性麻痺と云う極めて複雑にして多岐な内容をもつハンディキャップを生れた時から背負った人の幼児期より青年期に到るまでを通じ著者自身と患児の人間同志のぶつかり合いから生れた数々の体験に裏づけられた書物であってブームに遅れまいとするような通り一ぺんの書には絶対に見られない内容が盛られている。それは小池文英先生が序文で指摘されている通り、本書の臨床の章の痙直型、アテトーゼ型の数々の実例につき特徴をとらえつつ幼少児期から青成年期までの成長と病像の変化の諸段階を克明に著者自身の手で写真で追った記録が物語っている。著者自身が脳性麻痺児とかかわ

り合いをもつようになった経緯から、脳性麻痺の定義、診断根拠、患児心身の評価と詳細な評価表の紹介、身体的（運動）発達と精神的発達を促すことが脳性麻痺児の療育であるとする立場から早期発見と早期治療指導はもとより、脳性麻痺児の理学療法の諸方法、作業療法、言語療法、補装具と自助具、手術的療法、心理・教育的リハビリテーションより、リハビリテーションのための社会的資源と法律に到るまで数多くの図、写真、表をまじえて親切に説いてあり、脳性麻痺の人の全人間の生涯にわたる社会復帰に関する諸面を論じてあり、狭義の CP 児のリハビリテーションの技術書では決してない。脳性麻痺児をその行くすえまで見守ろうとする愛情が根底に流れているのが感じられる書物であるといえる。

B 5 頁 262 図 24 写真 764
1976 年 ¥6,800 円 200